



前日譚

01・目を覚ましたら、ひざまくら

とある年の秋。九月下旬の金曜日、二十二時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は十五度程度。

寒くなってきた秋の夜。

場所は、主人公の住むマンション『ガーデン逢瀬（おうせ）』の一階入り口すぐのロビーラウンジ。

主人公は今、ロビーラウンジに設置されたソファで眠っている。

もちろんそこは、眠るための場所ではない。

主人公自身、ここで寝ている人なんて見た事がない。

ここは住民とその関係者が、ちょっとした待合や、短時間の休憩に使う場所だ。目的もなくただだと占拠するのは、マナー違反だからである。

……であるにもかかわらず、主人公は寝ている。

先ほどまではかろうじて座っていたのだが、今は上半身から崩れ、ソファからずり落ちそうな体勢……つまり、身体全体が斜めになってしまっている。

このまま『ぐでん』と横になるのも、もはや時間の問題だろう。これは、なぜかという……。

酔っぱらったのだ。

主人公はこの地域にある学校『私立 逢瀬学園』で保健室の先生をしており、今日はその同僚達との飲み会だった。

しかし、主人公は一切お酒が飲めない。

同僚達もこれを知っているの、誰かが勧めて来る事もない。終始平和で、優しい会だった。

それなのに、なぜ主人公は酔っているのか。

誘惑に負けたのだ。

一時間ほど前、飲み会の終盤。主人公は己の体質と過去の失敗を、しっかりと理解した上で、お酒を飲んだ。

『一杯だけなら』と、実際には一杯分にも満たない量を、ほんの少しだけ……飲んだ。隣の先生が飲んでいたお酒がおいしそうで、あまりにも魅力的だった。

だから『せっかくの飲み会だし、少しだけならいいだろう』と、油断したのである。

……そして、こうなった。

それでも主人公は、マンシヨンまでは、問題なくたどり着いた。

少なくとも、飲み会の席では、特に誰にも迷惑をかけなかった……と思う。

だから後はもう、エレベーターに乗って自宅に入るだけ。

それで今日は終わる。はずだった。

だがここで、主人公は気づいてしまった。

普段は利用せず通過しているロビーラウンジには、いい感じのソファとテーブルがある。

という事に。

だから思った。『少し喉が渴いたな』『ここで、鞆に入れている水でも飲んでいこうか』『なんならちよつと、ここの雰囲気味わってみよう』と。

我ながら、なぜ、そんな事をしたのかよくわからない。

だが、人はお酒に酔うと、どんどんよくわからない事をしてしまうものである。

こうして主人公は。ソファへ腰かけ……。

ペットボトルの水を飲み干し、テーブルに置いて。

それから、なんとなく、目を閉じてみた。

——それがこの惨状を招いた。

主人公は目を閉じた途端あっさり眠りに落ち、そこからすでに数分が経過しようとしている。

不幸中の幸いは、ここまで誰も通らず、誰もここを利用しなかった事だろうか。だけど……。

——ここで、一人の少女がやってきた。

「……………？」

少女は入り口から現れ、オートロックを通過してここまで来ると、主人公の姿を確認して、ピタリと立ち止まる。

……眼前で若い女性が、一人すやすやと眠っている。

マンションのロビーラウンジで、ずいぶんと気持ちよさそうに、すびすびと寝息を立てている……。

そんな、にわかには信じがたい光景が広がっていたからだ。

なので、少女はしばし硬直したのち、その位置から、女性……つまり、主人公を観察してみる。

そして『ひとまず、命にかかわる要素はなさそうだ』と判断してから、ゆつくりと周囲を見渡した。

『主人公には、同行者がいるのかもしれない』

『その人はここから少し奥の自販機まで、飲み物でも買いに行っているのかもしれない』
そう考えたからだ。

だが、これは外れのようだ。

ロビーラウンジには今、主人公と少女の二人しかいない。

「……………」

だから少女は、もう少し主人公に近づく。

それから、主人公が寝ている場所の、向かい側のソファへ腰掛けてみる。

『少し待っていれば、同行者が姿を現すかもしれない』

『たとえば電話をかけに行ったりとか、部屋まで忘れ物を取りに行ったりとか。そういう理由で、今はここにいないのかもしれない』

『もしそうであれば、同行者の代わりに、しばらく主人公を見ていてあげるのも、やぶさかではない…………』

そう思ったのだ。

……だが、そのまま十分ほどが経過しても、誰かが来る気配はない。

主人公は一向に目を覚まさず、さすがの少女も、変化を待つのに、少し飽きてきた。

……さて。どうしたものか。

ここで、ほんの出来心で、少女が移動したのがすべての始まりだった。

少女はおもむろにソファから立ち上がると、改めて主人公の姿を観察する。

少なくとも、寝ようと思って寝たわけではなさそうだ。

主人公は明らかに不自然な体勢で、ずるんと傾いており、鞆なんて、無防備に床に落ちてしまっている。

……なんと危なっかしいのか。

少女は見えていられなくなつて、まずは鞆を拾い、テーブルに置く。

それから、なんとなく、本当に何の意味もなく、主人公の隣に座ってみた。
すると……。

〈主人公〉

「……………うん……………」

主人公が突如、寝たまま動いた。

どうにか斜めの姿勢を維持していたその身体が、少女の方へしなだれかかってくる。
そして……………。

【※音声ここから※】

SE1 ロビーラウンジの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック開始からトラック終了まで、小さめの音で流し続ける】

【0―10秒ほど流してからSE2】

さらに五분이経過したところで、主人公がようやく目を覚ました。

「淡々と無感動なようで、温かみのある声で。内心結構ホツとしている」

おお。起きた」

〈主人公〉

「……………?」

だが、当の主人公は、この状況をまるで理解できない。

『目を覚ましたら、女の子にひざまくらをされていた』

そんな、フィクションでしか見た事のない出来事が、己の身に起きているからだ。しかも、その相手は……。

「【淡々と無感情なように、優しく。

『まだ横になって』は『まだ横になっていいですよ』の略】
無理なくていいよ。まだ横になって」

〈主人公〉

「……………」

主人公、膝枕をされたままコクリと頷くも、ここからどうすればいいのかわからず、ポ

カンとする。

衝撃の展開のおかげで、酔いはすっかり冷めた。

だが、思考は完全にフリーズしており、おまけに頭がズキズキと痛む。普段ならできる事が、全部できない。

対する少女は、ポカンと口を開けている主人公を見て、何か合点がいったようだ。

『なるほど』とでも言うように小さく頷くと、あまり感情の読み取れない瞳で、主人公をじいっ……と覗き込む。

それから、とても優しい声で、こう言った。

「平坦に。事態を理解して」

あ。

【少し間をあけてから。

『主人公が沈黙するのも当然か』という感じで。

「ここでようやく『主人公は自分の名前を知らないのかもしれない』と気づく」
わかんないか。私の事。

【自己紹介しようとするが、ここで主人公が話し出したので途切れる】
私」

だが、主人公は膝枕されたまま、ふるふると首を振る。
彼女の名前を、主人公は知っていた。

〈主人公〉

「……わかる。わかるよ。」

……広末（ひろすえ）さんだよ。二年の」

「少し間をあけてから。」

驚いて小さく息をのむ、息づかいだけで表現する。

『おや』という感じで

……！」

主人公、痛む頭の右側を抑えながら、その名を口にする。

とたん、『広末さん』と呼ばれた少女は、目を丸くして、しばらく沈黙して……。それから、少し嬉しそうにした。

「しばらく間をあけてから。」

事態を飲み込むのに少し時間がかかっている。

『わ』は感嘆の『わあ』の略。

無感情気味だが、内心割と感動している。

主人公が、自分の名前を知っている事が嬉しい」
わ。

【少し間をあけてから。※マークまで『。』ごとにゆっくり、区切りながら話す。
内心かなり嬉しい】

そう。二年の広末（ひろすえ）。広末 イヴ。

わかるんだ。すごいね。

私、ほとんど保健室行った事ないのに」※

〈主人公〉

「わかるよ……自分の学校の生徒だもん。

でも、広末さん、なんでここに居るの……？」

ここで主人公は、主人公にとっては至極真つ当な疑問をぶつける。

しかしイヴにとっては、それよりも、もっと重要な問題があるようだ。

その回答が得られるのは、もう少し先となる。

「少し呆れているようだが優しく」

でも、それはこっちのセリフ。

先生、何でこんなところに居るの？

「とても心配しているが、これ以前と同じトーンで。

あまり切迫しているようには聞こえないように」

ラウンジで寝てる人なんて初めて見たよ。

「恐る恐る、不安そうに尋ねる。少し声のトーンが重くなる。

『具合、悪いの』は質問だが、『?』はつかず語尾は上がらない。

『見たところ、明らかに気持ちよく寝ているだけだったが、万が一という事もある』
という感じで」

具合、悪いの。救急車呼ぼうか」

主人公、イヴの心配そうな声を聞いて、ハツとする。

彼女は主人公というただの酔っ払いの事を、とても心配してくれている。
一刻も早く誤解を解かねばならない。

〈主人公〉

「大丈夫。ありがとう。」

……ただ、寝ちゃってただけだから。
救急車は、呼ばなくて大丈夫」

「あまり感情が読み取れないが、内心かなりホッとして
そっか」

〈主人公〉

「ところで、その……わたし、どの位寝てた？」

「少し間をあけてから。」

主人公が眠っていたと推定される、おおよその時間を計算している」
んー。

「少し間をあけてから。自然に答える。」

『迷惑だった』『待たされて疲れた』とは思っていない」
私が来た時にはもう居たから、少なくとも十分位かな。

「ゆっくりと。淡々としているが優しく。」

『ケガしてたりしてない？』は疑問形だが語尾はあまり露骨に上げない。

今度は、眠ってしまうまでの過程で、頭や身体はどこかを打っていないか心配している」
そうだ。どこか打つてたり、ケガしてたりはしない？

「ここで、家に人がいるなら、その人に預けた方が良いと気づく」
おうちの人、居るなら連絡しようか」

イヴ、淡々としながらも、心配そうな声音でたずねる。
それを聞きながら、主人公は思う。

な、なんて優しい子なんだろう……。

わたし、これまで広末さんの事、勝手にクールそうな子だと思っていたけれど……。
こんなに親切な子だったなんて。

と。

しかし、そう思えば思うほど、申し訳なさも増してくる。

イヴはこんなにも主人公の身を案じてくれているのに、主人公がこうなった経緯は、あまりにも残念過ぎるからだ。

〈主人公〉

「……ありがとう。それも、大丈夫。

ちよつと頭は痛いけど『気分が悪い』ってほどじゃあないんだ。

おうちの人の件も、大丈夫。わたし、一人暮らしたから。ちゃんと、自力で帰れるよ。
……で、えっと、あの。

なんでわたしがここに居たのかと言いますと」

「**淡々と、だが優しく続きを促す**」

うん」

主人公、一通り回答し終えたところで、もごもごする。

イヴの真剣なまなざしが、心をザクリと突き刺す。

だからと言って、言わないわけにはいかない。

彼女には真相を知る権利があるからだ。

〈主人公〉

「実はさっきまで、先生達と飲み会だったんだけど。

……そこで、ちよつと酔っぱらっちゃって。

で、ここで水でも飲んで休憩しようと思ったら、そのまま寝ちゃったみたい。
つまり……ただそれだけなの。本当にごめんなさい。

心配かけちゃったよね」

「淡々と、だが優しく相槌を打つ。『飲み』は『飲み会』の略」
ふーん。先生達の飲みだったんだ。

「一度安心しかけるが、ここで『なんだかおかしい』と気づく。
少しだけ、他の先生達を非難するように。

『飲み会で誰かに無理やり飲まされてこうなったのなら、ひどい』と思っている。
主人公の事をよく知らないため『主人公はお酒に弱い』という発想がない」
えっ……お酒、飲まされたの」

主人公、ここでさらに『ハッ!』と気づく。

大切な事を言うのを忘れていた。

そうだ。周囲にもよく言われるのだ。『雪城先生、お酒弱そうに見えないのにね』『むしろすごく強そうに見える』と。

それはもう、己の見た目から発生したと思えない、完全な誤解なのだが……。

〈主人公〉

「あ。ちがうちがう。

……わたし、全くお酒飲めないんだけど。

もう、コップに半分も飲めない位弱くて、飲んだらすぐ眠たくなっちゃうんだけど。先生達もそれ知ってるし、だから、いつもは飲まないし、進められる事もないんだけど。その……今日は……他の先生が飲んでたお酒がおいしそうで」

「【少しだけ驚いて。『どうやら、想像していたのとは違うらしい』と理解する。

『え』と『へっ?』の中間のような『へ』

へ」

〈主人公〉

「つい……『一杯なら大丈夫かな』って、頼んじやったんだよね。で。全然大丈夫じゃなくて、こうなっちゃったんだけど」

「【息を吸い込む。息づかいだけで表現する。

あまり反応がないように見えるが、実際は真相を知って、力が抜けている】

……………」

五秒ほど沈黙。

ああ、広末さん、これ、絶対呆れてる……。

主人公、膝枕されたまま、ふいに訪れた沈黙に情けなくなる。

これまで主人公は、学校ではこれといった失敗はなくやってきた。

もちろん、多少のドジはする。だが、教師間ではともかく、生徒間においては『ダメな先生』という認識は持たれていないはずだ。多分。と、思っていた。

だが、それももう終わりだ。

今日から自分は『酔っ払い先生』の名をほしいままにする事になるだろう。

ああ、情けない……。

そう思っていると……。ふいに、イヴが笑った。

「しばらく間をあけてから。

安心したような、温かい笑い」

あは。

【優しく笑いながら、主人公の言葉を復唱する。

ただし、笑っていてもなんだか淡々としている】

先生、飲めないのに、今日は我慢できなかったんだ。

つい『一杯なら平気』って思っちゃったんだ。

【少し間をあけてから。

感情がわかりやすく伝わってくるほど、気が抜けている。心底ホッとして】
なんだ。

【少し間をあけてから。とても優しく】

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします。

良かった」

〈主人公〉

「……………」

主人公、優しく許されて、顔がかーっと熱くなる。
これでは、どちらが年上なのかまるでわからない。
でも、決して嫌な感じはなくて、むしろ、温かく、くすぐったいような気分だ。

だから、主人公が何だか照れてしまっている……。なぜだかまったくわからないが、ふいに、イヴの手が伸びてきた。

SE2 イヴが主人公の頭を撫でる音

【最初から最後まで流す】

【0―5秒ほどまでの、二回分の『なで、なで』を流す】

【それから、もう二回分の『なで、なで』を次のセリフ『よし、よし』とかぶせる】

【淡々と、ゆっくりと。無感情なようで、優しく】

よし、よし」

〈主人公〉

「……………」

【自然に、穏やかに。

『それぐらい、たまにはいいでしょう』程度のナチュラルな感じで』
いいんじゃない。たまには」

〈主人公〉

「そうですか……？」

「〔自然に、穏やかに。〕

『主人公は今回事件や事故に巻き込まれず、無事に自宅マンションに戻ってこられた。だから、今回に関しては、まあ不問でしょう』という意味で言っている」
うん。無事に帰ってこられたみたいだし」

〈主人公〉

「……これ、無事なのかな」

「〔自然に、淡々と。〕

『確かにこのままではよくなかったが、比較的早期と思われるタイミングで、自分が発見したからいいだろう』という意味で言っている」

……まあ、私が見つけたから、セーフ？」

〈主人公〉

「セーフかあ……」

「少し嬉しそうに。『セーフである』という事を主張したい」
そう。セーフ」

〈主人公〉

「……………」

主人公、イヴに膝枕されたまま、ぽかん……。とする。
優しく撫でられた頭と、膝から伝わる体温が心地いい。
そして、彼女の言葉を咀嚼するうちに

——広末さんが言うなら、まあ、そうなのかな？

と、流されそうになってくる。

広末イヴという少女は、なんだか不思議な子である。
年齢以上の落ち着きというか、独特の雰囲気があつて。
たとえば彼女が『Aだ』と言うと、本当に『Aである』ような……そんな気がしてくる
のだ。

……だが、たとえそれが楽だからと言って、あいまいにせず、はっきりさせておかなければならない事がある。

それは……。

〈主人公〉

「ところで、なんでひざまくらしてくれてるの……？」

この状況についてである。

これは、明らかに、そう簡単に起きるような事ではない。
少なくとも主人公はそう思うのだが、イヴはまたも、事もなげに答える。

「自然に、淡々と。」

この現状、つまり『年下であり、生徒の自分が、年上であり、教師の主人公を膝枕している』という事について、特におかしな事だと思っていない」

ああ。これね。

【なので『主人公は、こうなった経緯を質問しているのだ』と思っている】
さつき、私が傍まで来たら、先生がこう……

【『こてん』は擬音】

こてん。って倒れてきて。

【少し間をあけてから。

しれっと。

明らかに説明不足だが、気づいていない】
だから膝枕。

【自然に、淡々と。それでも、自分なりに補足を始める】
座ったまま寝たら首痛くするし。

別に重くないから、このままこうしていいよ」

〈主人公〉

「あ、そお？」

「ゆっくりと頷く。

『何も問題はないから、ぜひそうしていなさい』という感じで
そお」

〈主人公〉

「ありがとう……」

「自然に、淡々と。」

ここで、先ほどから気になっていた事へ話題を変える。

膝枕の話は、もう終わったものだと思っている」

ていうか、先生って何（なん）かいいい匂いするね。

【その理由として、まず思いつくものを上げるが、違うような気がしている】
香水……。

【香水以外だろうと推測する。

香水にしてはささやかで、主張しない匂いなので。

また、保健室の先生が香水の匂いをぶんぶんさせているというのは、少し考えにくいので】

じゃないよね」

主人公、質問され、膝枕の件は忘れてキョトンとする。

一体何の事だろうか。

まず、よい匂いの出所が『香水ではない』という指摘は正しい。

主人公は学校にいる時や学校関連の外出の際は、一切香水を付けないからだ。
だが、かと言って『それは○○の匂いである』という見当はつかない。

主人公の頭は、まだぼんやりしている。
それでも思いついたのは……。

〈主人公〉

「柔軟剤かな……」

「【少し嬉しそうに。『なるほど』という感じで】
あ。柔軟剤」

〈主人公〉

「こだわりの、ちよつといい柔軟剤です」

「【少し嬉しそうに。主人公が補足してくれたので】
こだわりの？ ふふ。」

「【少し間をあけてから。
相変わらず淡々としているが、主人公の匂いが、とても気に入っている】
うん。私もこれ、好き」

〈主人公〉

「ところで……」

「淡々と自然に。『まだ何か気になる事ってあった?』という感じでうん?」

〈主人公〉

「広末さんはどうしてここに?」

「きょんとんとして、少し反応が遅れる。

自分の事を質問されるとは思っていなかった。

だがすぐに『確かにそれは気になる事かも知れない』と気づく」

あ。私?

「なので説明をする。

※マークのセリフ終わりまで、淡々と、自分のアルバイト事情について話す」
私はバイト帰り。

月水金（げつすいきん）は、十時までピザ屋。
で、この位の時間に帰ってくる」※

〈主人公〉

「帰る……？」

「淡々と自然に、当然の事として話す」
「そお。帰る」

帰るって……どこへ……？

主人公の頭は、いまだに覚める気配がない。

『広末さんはこれから帰宅するところなのに、どうしてうちのマンションにいるんだろ
う……』と、トンチンカンな事を考えている。

「『ようやく』もしかすると、主人公は自分もこのマンションに住んでいると知らないのでは
ないか』とようやく気付く」

あ。

「淡々としているが少し楽しそうに。ネタバラシをする気分。
そう思うと、色々納得がいく」

そっか。知らなかったか。

【少し嬉しそうに】

私も。ここ住んでるんだよ」

〈主人公〉

「ここって……。ここ？」

「淡々と、『。』ごとに区切ってゆっくりと、自然に、でも少し嬉しそうに」
そう。ここ。『ガーデン逢瀬（おうせ）』

〈主人公〉

「えっ！」

SE3 主人公が『がばっ！』と起き上がる音

【最初から最後まで流す】

主人公、ここで突如『がばっ！』と起き上がる。
衝撃の事実を知らされたからだ。

対するイヴは、まるで驚いていない。

むしろ『こんなに勢いよく起きられるなんて、元気があるようでよかった』という顔を
している。

「さほど驚いておらず、むしろ感心した様子で。

『良かった。起きられるんだ』と思っている」
おお。起きた」

〈主人公〉

「知らなかった！」

「淡々としているが、内心は少しだけ不満。

『やはり知らなかったのか……。どうりで……。』と、これまでの主人公の行動を振り返っ
ている」

だろうね。

『でもまあ、そんなものか』と考え直す」

同じマンションってだけじゃ、別に会わないもんね。

【少し間をあけてから。ほんの少しだけドヤって。

不満はあるが『同じマンションに住んでいる』という事を、自分が一方的に知っていた件については、なんだか優越感がある】

でも私は、先生が住んでる事知ってたけど」

〈主人公〉

「え……?」

「なんだか含みのある感じで。

実際はただ嬉しくて笑っているだけなのだが、なぜかそんな風に聞こえる】
ふふ。

【少し間をあけてから。

『身体を起こせるなら、そろそろ頃合いだろう』と思っている】
さて。そろそろ行こうか。

ここ、あんまあつたかくないし。ずっと居ると身体冷やすかも。

【自然に、当たり前のように】

部屋まで送るね」

〈主人公〉

「えっ！」

イヴ、身体を起こした主人公を至近距離で見つめると、それが当たり前のように言う。
だが、さすがの主人公も、もう流されない。

酔って寝ていたところを介抱してもらった上に、自宅まで送ってもらう。
そんな教師は、ちよつと情けないが過ぎると思つたからだ。
だが、イヴはやはり気にしていないようである。

「きよんととして。『何かおかしい事はあつた?』という感じで
え?」

〈主人公〉

「あの、広末さんの気持ちはとても嬉しいのだけど……。

さ、さすがにそこまでしてもらうわけには……。」

イヴ、慌てふためいている主人公の顔を、またも、じいっ……。と見つめる。
譲る気はないようだ。

「くすくすと、優しくからかう。慌てる主人公が可愛い」
だって。またここで寝ちやったら困るし？」

〈主人公〉

「ああ……それを言われると……」

主人公、それを言われると、ぐうの音も出ない。

それに『ここがあまり暖かくない』のは、イヴにとっても同じである。
意地を張って話を長引かせるよりも、素直にお言葉に甘えた方がいいだろう。

〈主人公〉

「本当にごめんなさい……」

いや、ありがとう。じゃあ、よろしくお願いします」

「【少し嬉しそうに。要望が通ったのでさらに少し機嫌がよくなる】
気にしないで。」

困った時は助け合いでしょ」

SE 4 イヴがソファから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

「優しく」

立てる？

【少し間をあけてから。自然に。

それが当たり前のように、まだ座っている主人公に手を差しのべる』
はい、手」

〈主人公〉

「あ……ありがとう……」

SE 5 主人公がソファから立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

な、なんだか、結局終始広末さんのペースだったような。

……ま、いいか。

主人公、そんな事を考えつつも、素直に差し出された手を取る。
同じ位の大きさの手だが、とても大人っぽく感じられる。

実際に大人なのかもしれない……年上のわたしよりも。

〈主人公〉

「ありがとう……付き合ってくれて」

「【穏やかに淡々と】

ううん。私はもう帰って寝るだけだし。

【淡々としているが、少し淋しそうに】

家帰っても、誰も居ないし」

〈主人公〉

「え……」

主人公は聞き返したが、イヴには聞こえなかったようだ。

何事もなかったかのように微笑むと、そのまま主人公と一緒に歩き出す。

SE 6 主人公とイヴが廊下を歩く音

【最初から最後まで流す】

【※少しエコーがかかる※】

SE 7 イヴがエレベーターのボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

「主人公の住んでいる階を知らないという事を、今思い出して」

あ。

そうだ。何階？」

〈主人公〉

「……あ！ 七階です」

「優しく。聞き取れなかった」

ん？

【少し間をあけてから。

少し申し訳なさそうに。『もう一回いい?』は『もう一回聞いていいですか?』の略】
ごめん、聞こえなかった。もう一回いい?」

〈主人公〉

「七階だよ」

「【素で驚いて】

え?」

SE8 エレベーターが到着する『ピンポーン』という音

【最初から最後まで流す】

SE9 エレベーターのドアが開く音

【最初から最後まで流す】

ここで、エレベーターが到着する。

しかし、イヴは乗り込まず、主人公もつられて乗り込めずにいる。

イヴは今日一番——でもやはり感情薄めに——驚いた顔をしている。
その理由は……。

〈主人公〉

「？」

「ぽかんとして」

同じ階だ」

二人は、同じマンションに住んでいるだけではなく、同じ階の住人らしいからである。
ここでフェードアウトして終了。